

旧約における主の例祭の預言的意味

第三回目

## 種を入れないパンの祭り (ハグ・ハンマツオート)



ベレーシート

●主の例祭には、神の不変のご計画(マスタープラン)が啓示されています。

今回はその第三回目、「種を入れないパンの祭り」を取り上げます。口語訳、新共同訳は「除酵祭」と訳しています。「種の入らないパン」とか「種入れぬパン」の祭りという訳語もあります。英語では the Feast of Unleavened Bread と訳されています。

【新改訳改訂第3版】レビ記 23章 5～8節

5 第一月の十四日には、夕暮れに過越のいけにえを【主】にささげる。

6 この月の十五日は、【主】の、種を入れないパンの祭りである。七日間、あなたがたは種を入れないパンを食べなければならない。

7 最初の日は、あなたがたの聖なる会合とし、どんな労働の仕事もしてはならない。

8 七日間、火によるささげ物を【主】にささげる。七日目は聖なる会合である。あなたがたは、どんな労働の仕事もしてはならない。

【新改訳改訂第3版】出エジプト記 13章 3～8節

3 モーセは民に言った。「奴隷の家であるエジプトから出て来たこの日を覚えていなさい。【主】が力強い御手で、あなたがたをそこから連れ出されたからである。種を入れたパンを食べてはならない。

4 アビブの月のこの日にあなたがたは出発する。

5 【主】があなたに与えるとあなたの先祖たちに誓われたカナン人、ヘテ人、エモリ人、ヒビ人、エブス人の地、乳と蜜の流れる地に、あなたを連れて行かれるとき、次の儀式をこの月に守りなさい。

6 七日間、あなたは種を入れないパンを食べなければならない。七日目は【主】への祭りである。

7 種を入れないパンを七日間、食べなければならない。あなたのところに種を入れたパンがあってはならない。あなたの領土のどこにおいても、あなたのところにパン種があってはならない。

8 その日、あなたは息子に説明して、『これは、私がエジプトから出て来たとき、【主】が私にしてくださったことのためなのだ』と言いなさい。

●レビ記の 23 章 5 節には「第一月の十四日には、夕暮れに過越のいけにえを【主】にささげる。」ということが記されています。この最初の月の十四日の夕方から始まる例祭のことを「ベサハ」(בֶּסַח)と言い、前回学びました。その祭りと連動して、翌日から「種の入らないパンの祭り」(ハグ・ハンマツオート、חַג הַמַּצּוֹת)を七日間することが命じられています。「過越の祭り」は一日だけですが、それに続く「種の入らないパンの祭り」は七日間続き、「種の入らないパン」を食べなければなりません。しかも、七日間の最初と終わりには聖なる会合を開き、一切の仕事が禁じられます。その間に安息日が必ず入りますから、その時にも一切の仕事はできません。また、「種を入れない

春の祭り **メシアの初臨において成就**

- ① 過越祭
- ② 種を入れないパンの祭り(出 23:15)
- ③ 初穂の祭りー
- ④ 五旬節(シャブオット)  
ー初穂の祭りから 50 日後の日曜日

秋の祭り **メシアの再臨において成就**

- ⑤ ラツパの祭りー第 7 月の第一日ー
- ⑥ 贖罪の日
- ⑦ 仮庵祭

「種が入らないパンの祭り」では、七日間を通して、毎日、全焼のいけにえと穀物のいけにえ、そして罪のためのいけにえを規定に従ってささげなければなりません。この時期の穀物のささげものといえば大麦です。おそらく「種が入らないパン」の材料は小麦ではなく、大麦によるものであったろうと思われます。

●「過越の祭り」と「種が入らないパンの祭り」はワンセットになっており、「五旬節」の祭りと秋の仮庵の祭りと並ぶ主の三大例祭の一つです。年に三度、これらの祭りには壮年の男子は必ず集まらなければならず、もし集まらなければイスラエルの民から切り離されるという定めでした。それほどに神の民によっては重要な祭りであったのです。「祭り」というと、私たち日本人は「ハレ」の面を思い描きますが、とりわけ、「過越」と「種が入らないパンの祭り」の8日間は、いわば神の民にとって、厳粛な聖会、聖別の集会がもたれた期間であったのです。

## 1. 「種が入らないパン」とは

●ちなみに、その期間に食べるパンを「マツァー」(מַצָּה)と言います。「マツァー」は単数形、「マツォート」(מַצּוֹת)は複数形です。右の写真は現代の市販されている「マツァー」(מַצָּה)ですが、イースト菌(酵母)が入っていないため、クラッカーのように見えます。実際、主の例祭で食した「マツァー」は右下図のようなものであったろうと思います。今日のクラッカーは、程よく塩が塗(まぶ)してあって、それだけでも十分美味しく食べられますが、塩気のない本当の「マツァー」はとても美味しいとは言えないようです。また、写真を見ると分かるように、細かい小さな穴がたくさんあります。それは気泡が入って膨らんでしまわないように、あたかもイースト菌が入っていると思われたいめようです。いつも美味しいパンを食べている人にとってはパンとは言えない代物です。



●なぜ、イスラエルの民たちは「パン種」の入らないパンを食べなければならないのでしょうか。それは、聖書においては、「パン種」は常に「罪の象徴」だからです。ヘブル語で「パン種」のことを「ホーメツ」(חֶמֶץ)と言いますが、その語彙には「酸っぱい」「苦い」という意味があります。私たちを「酸っぱく」し、「苦い」者としてしまうのが罪の性質です。逆に、「マツァー」、すなわち「種が入らないパン」は「酸味のない甘いパン」という意味になり、罪のない生活の喜びや健全さを象徴しているのです。つまり、過越の祭りを通して、イスラエルの民が神によってエジプトから贖い出されたのは、傷もなく汚れもない小羊の血によったのであるということを確認した後に、罪から離れて神の民としてふさわしく生きるための方向づけとして、七日間にわたる「種が入らないパンの祭り」が制定されたということです。「パン種」はわずかの量でもパン全体に大きな影響を与えます。「七日間」というのは、「完全に」という意味が込められています。

## 2. 「種が入らないパン」を食べるといふ預言的な意味

●「種が入らないパン」を食べるといふことは、神のご計画(マスタープラン)において、二つの預言的な意味があり

ます。一つは、メシアであるイエシュアの生涯が全き罪なき生涯であったということ。もう一つは、主に召された者たちが、あらゆる思いと行いにおいて、聖なる方にならってふさわしく生きようになるということです。この二つについて、考えてみたいと思います。

### (1) 小羊なるキリストの生涯が、罪なき完全な生涯であったという事実を思い起こすこと

●第一の月の十四日の過越の祭りにおいても「種を入れないパン」が食されましたが、翌日(十五日)から七日間にもわたって「パン種」の入らない「マツター」を食べなければなりません。その命令が意味するのは、家々の二本の門柱とかもいに塗られた血が傷のない羊のものであったからです。つまり、過越に使われた羊が傷のない完全な小羊であったように、やがて神から遣わされる神の子メシアの生涯も完全に罪のない方であることを預言的に啓示するものでした。

●**罪なきキリストの事実**について確認するために、当教会では、毎週木曜日、ヘブル人への手紙を「突っ込み聖研」として学んでいますので、その手紙の中に記されていることを見たいと思います。この手紙の主旨は、なぜイエシュアが永遠の大祭司となられたのかということを抱っています。その根拠は以下のとおりです。

- ① 御子は、罪のきよめを成し遂げられた。(1:3) 「罪のきよめ」とは一切の罪の記録を消し去ることを意味します。
- ② 御子は、罪のなだめがなされるために、すべての点で兄弟たちと同じようにならなければならなかった。(2:17)
- ③ 御子は、罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように試みに会われた。(4:15)
- ④ 大祭司の務めとは、人々と自分のために、罪のためのささげ物といけにえとをささげること。(5:1,3)
- ⑤ 大祭司キリストは、ほかの大祭司たちとは違い、毎日いけにえをささげる必要はない。(7:27)
- ⑥ キリストはただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために来られた。(9:26)
- ⑦ キリストが一つの永遠のいけにえをささげられたので、罪のためのささげ物はもはや無用となった。(10:12,18)
- ⑧ 「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」との神の約束が実現した。(10:17)

●罪なきキリストの事実—完全な永遠に有効な罪のためのいけにえはすでにイエシュアによって実現しています。しかし、いまだその主に召された私たちが主の召しにふさわしい者とはなっていない現実があります。

### (2) 主に召された者たちが、あらゆる思いと行いにおいて、聖なる方にならってふさわしく生きることを目指す

●使徒ペテロはその手紙第一の中で、「あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとなりなさい。」(1:15)と述べています。また使徒パウロもコリント人への手紙第一の5章の中で、「6・・あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。7 新しい粉のかたまりのままにいるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。8 ですから、私たちは、古いパン種を用いたり、悪意と不正のパン種を用いたりしないで、パン種の入らない、純粋で真実なパンで、祭り(※)をしようではありませんか。」(Iコリント5:6~8) (※)ここでの「祭り」とは礼拝のことです。

●先ほどと同様に、ヘブル人への手紙の中から、罪なきキリストの事実を見ましたが、ここでは**罪に対する私たちへの勧め**を見たいと思います。

- ① 日々互いに励まし合って、だれも**罪に惑わされてかたくなにならないように**しなさい。(3:13)
- ② もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪のためのいけにえは、もはや残されていません。(10:26)
- ③ モーセは、**はかない罪の楽しみ**を受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取った。(11:25)
- ④ こういうわけで、このように多くの証人たち(旧約の信仰の模範者たち)が、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷と**まつわりつく罪**とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けようではありませんか。(12:1)

### 3. 実生活において「パン種を取り除く」=聖別された歩み

●旧約の神の民たちが、年に一度、共に集まって、七日間「種の入らないパン」を食べたように、今日の私たちも「まつわりつく罪」(すぐに絡みついてくる罪)を捨て去って、私たちの前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けることが求められています。

●詩篇 15 篇 1 節と詩篇 24 篇 3 節に、以下のようなフレーズ(太文字)があります。

【新改訳改訂第3版】詩篇 15 篇 1~5 節

ダビデの賛歌

- 1 **【主】よ。だれが、あなたの幕屋に宿るのでしょうか。**  
**だれが、あなたの聖なる山に住むのでしょうか。**
- 2 正しく歩み、義を行い、心の中の真実を語る人。
- 3 その人は、舌をもってそしらず、友人に悪を行わず、隣人への非難を口にしない。4 神に捨てられた人を、その目はさげすみ、【主】を恐れる者を尊ぶ。損になっても、立てた誓いは変えない。5 金を貸しても利息を取らず、罪を犯さない人にそむいてわいろを取らない。このように行ふ人は、決してゆるがされない。

【新改訳改訂第3版】詩篇 24 篇 3~6 節

ダビデの賛歌

- 3 **だれが、【主】の山に登りえようか。**  
**だれが、その聖なる所に立ちえようか。**
- 4 手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人。
- 5 その人は【主】から祝福を受け、その救いの神から義を受ける。
- 6 これこそ、神を求める者の一族、あなたの御顔を慕い求める人々、ヤコブである。 セラ

●詩篇 15 篇と詩篇 24 篇は言葉が異なっていますが、内容的にはほぼ同じことが語られています。特に、詩篇 15 篇は、詩篇 14 篇の「神のサーチ」と関連しています。「サーチ」(search)とは、何かを見つけようと、丹念に、注意深く、徹底的に、くまなく捜すことを意味します。「主は天から人の子らを見おろして、神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうかをご覧になった。」-これが神のサーチです。ところが、「彼らはみな、離れて行き、だれもかれもが腐り果てている。善を行なう者はいない。ひとりもない」(詩篇 14:2~3)というのが神のサーチの結論でした。人間に対するこの神の結論(評価)に対して、もし自分にはこれは当てはまらないと考えるならば、15 篇 1 節の「主よ。だれが、あなたの幕屋に宿るのでしょうか。だれが、あなたの聖なる山に住むのでしょうか。」という誠実

な問いは出てこないように思えます。

●とりわけ、詩篇 15 篇は、「神と人」、「人と人」との両者の密接な関係についてのあるべき姿を提示しています。ある人は「神に対する信仰は、人間関係の中で吟味されて、真実なるもの、純粹なものになる」と述べています。神との関係、人との関係・・・これは車の両輪で、どちらかがないがしろにされてもまっすぐに進むことはできないということです。神との親しい関係を築こうとする礼拝者は、隣人との関わりと密接な関係にあります。

●1 節の「だれが」という問いかけに対する答えは「正しく歩み、義を行ない、心の中の真実を語る人(口語訳では、心から真実を語る者)」です。LB 訳では「非の打ちどころのない生活を送る、誠実そのものの人」とあります。そしてそのあとに、人との関係におけるチェックリストが 8 項目並んでいます。すべてに○印がつけられるならば、その人は「決してゆるがされない人」だというのがこの詩篇の結論です。どれだけこのチェックリストに○印をつけられるでしょうか。LB 訳で挙げてみると・・・

- |                       |                                 |
|-----------------------|---------------------------------|
| ① 口が裂けても人を中傷しない。      | ⑥ たとい危害を受けても約束は破らない。            |
| ② うわさ話に耳を貸さない。        | ⑦ 高い利息で負債者を窮地に追い込むようなことをしない。    |
| ③ 決して隣人を傷つけない。        | ⑧ 賄賂を受け取って無実の人に不利な証言をまちがってもしない。 |
| ④ 大胆に罪を告発し、それを明るみに出す。 |                                 |
| ⑤ 主に忠実な者をほめる。         |                                 |

●もし上記の 8 項目に記された生き方ができるなら、なんと幸いかと思います。特に、「損になっても、立てた誓いは変えない」(4 節)というような生き方をしてみたいものです。多くの人たちからの信頼を得ることは間違いなはずです。そんな自分の思いと現実にはギャップがあります。自分を欺かずにこれらの項目をひとつひとつ吟味してみるなら、とても○印をつけることはできません。印のつかないところがひとつでもあるなら、礼拝者としては失格だというのが律法の基準です。そして私も「義を行なう者はいない。ひとりもない。」の部類に間違いなく入る者であることを認めざるを得ません。

●神のご計画においては、メシアが再臨される前に携挙があります。そのとき私たちは「朽ちないからだ」が与えられて、神の律法に従った生き方をすることが完全に可能となります。それがエレミヤやイエシュアのいう「新しい契約」です。しかしそれまでは、ヘブル書が言うように、「まわりつく罪を捨て去る」という戦いが求められます。そして、その戦いの力もすでに恵みとして与えられています。ですから、イスラエルの民たちが「祭り」という形で、定期的に自己点検をうながされたように、私たちもそのようにすべきです。ある教団・教派では、罪からの聖別を目的としたきよめの集会、神の恵みを求める聖会が持たれています。そうした聖会の利点は、個人のレヴェルではどうしても甘くなってしまう罪をより深く取り扱ってくれるという恵みの機会となることです。そうした機会に恵まれなくとも、自ら、**キリストの花嫁として聖められ、整えられるために**、毎日、毎日、あるいは定期的に「種なしパンの祭り」をする必要があるのです。以下に取り上げるのは、そのための一つの提案です。

#### 4. 罪の鎖から解き放たれるために

●現代の女性預言者と言われる M・バジレア・シュリンクという方がおられます。彼女の著作に、「**変えられたいあなたに**」と題する本が出版されています(マリヤ福音姉妹会出版、改訂版 1988 年)。そうした本を援用しながら、私たちのうちに巣くっているパン種を見つけ、そのパン種の鎖から解き放たれる経験を積み上げていくことができます。その本には **45 の個々の罪**が(あいうえお順に)取り上げられています。ここでは、その項目だけを紹介したいと思います。実際の取り組み方としては、これらの個々の罪についてひとつひとつじっくりと黙想していくことが必要です。すでに私たちはキリストの花嫁となることが決められているのです。私たちは花婿のことを思いながら、「パン種」を取り除いていくという整えが求められているのです。あくまでも、神のヴィジョンを共有することが、聖書のいう「愛」なのです。

- |                        |                          |
|------------------------|--------------------------|
| (1) あてにならない・無責任        | (24) 短気                  |
| (2) あわれみの心の欠如          | (25) 中傷・人に対する悪口          |
| (3) 怒り                 | (26) 独善・自己正当化            |
| (4) 嘘・虚偽・隠しごと          | (27) 貪欲・むさぼり             |
| (5) うぬぼれ・虚栄心           | (28) 情け知らず・愛の欠如          |
| (6) エゴイズム・自己中心         | (29) 軟弱・怠惰・安逸な心・無気力      |
| (7) おしゃべり              | (30) 肉欲                  |
| (8) 思い煩い               | (31) ねたみ                 |
| (9) 感謝の念の欠如            | (32) 反抗                  |
| (10) 我意・わがまま           | (33) 卑怯                  |
| (11) 偽善                | (34) 人の関心をひき、認められたいという願い |
| (12) 権力欲・支配力           | (35) 批判・さばき              |
| (13) 迎合・人への恐れ          | (36) ひやかし・あざけり           |
| (14) 口論・分裂             | (37) 不信                  |
| (15) この世への愛と隷属         | (38) 不従順                 |
| (16) 嫉妬                | (39) 不和・苦々しい思い           |
| (17) 自己憐憫              | (40) 不信仰・落胆              |
| (18) 神経過敏              | (41) ぼんやり・空想             |
| (19) 十字架、苦しみを避けようとする思い | (42) 抑圧・憂うつ              |
| (20) 詮索                | (43) 利己主義・けち             |
| (21) 尊敬の念の欠如           | (44) 立腹・いらだち             |
| (22) 高ぶり・傲慢            | (45) 無頓着・なまめるさ           |
| (23) 多忙                |                          |

●最後に、「種の入らないパン」を「マツァー」(מֶצֶה)を食べるなら、私たちの心は必ずや「強く」(「アーマツ」אַמֶּץ)されるのです。「マツァー」(מֶצֶה) と「アーマツ」(אַמֶּץ)は近親語です。 2015.1.25